

成果報告書

記入日 2023年 4月 17日

フリガナ：(サトウ イブキ) 氏名：佐藤 夢姫	渡航先国名 タイ・チェンマイ	留学先の所属機関：Language Institute, Chiangmai University 帰国後の所属機関：青山学院大学
研究テーマ：オーガニックコーヒーの生産によるタイ山地民への経済的影響とその課題		
研究期間：2022年3月～2023年3月(1年1ヶ月)		
研究成果(概要) タイの山地民はオーガニックコーヒーを中心とした生産物の流通・消費によって、経済且つ社会的価値を両立させていた。しかしボランティアのみで運営しているため、組織体系の点で更なる改善点が見られた。		
研究成果(詳細) 1. <u>研究先について</u> 今回1年間研究先としてお世話になったのは、タイ北部のチェンマイ県市内から90km、チェンライ県市内から90kmという県境にあるNPOのルンアルン(意味：暁)プロジェクトである。ルンアルンプロジェクトは1987年5月にタイの少数民族の一つであるリス族の生徒寮を設立したことに始まった。当時村に学校がない地域も多く、リス族以外にも様々な山地民にとってこの生徒寮は寄宿舎としての重要な役割を果たしていた。現在は、働きながらではないと就学できない困窮家庭の青少年を受け入れることを中心に、職業訓練センターとして新たに運営している。 2. <u>プロジェクト活動一覧</u> ① タイ山地民への教育支援 1) 職業訓練センター暁の家 学校外教育のスクーリングを受けながら暁の家で有機農業、食品加工を学ぶ実習生の受け入れ 2) ルワンアルン奨学金 山地民の高校生・大学生への教育支援金補助 3) 山間地の保育園支援 施設・備品の援助、保育士研修、移動図書館活動またボランティアによる保育園の壁絵作成など		

② 持続型農業支援と環境

1) 環境と調和した農作物の奨励

大気汚染を引き起こす焼畑や化学肥料・農薬に頼らない有機栽培(ex コーヒー)、自然栽(ex アッサム茶)の農作物の栽培精製加工を奨励し、市場を開拓する。

2) 水源の森を広げるための植林活動

山地民の人々の独自の文化・生活環境、生産活動を守るため、毎年雨季に植林、乾季に防火帯を作る。

3. 調査の進め方

実際に暁の家に滞在しながら、コーヒー豆の栽培や収穫を山地民の現地スタッフとともにを行い、コーヒー豆のパッケージングまでを手伝わせていただいた。ルンアルンプロジェクトの内部に関わり、実際の業務経験と生産者である山地民へのヒアリングをもとに調査を進めた1年間であった。



左：コーヒー豆収穫時 真ん中：採れたてのコーヒーチェリー 右：出荷するコーヒー豆

4. コーヒー豆の生産について

ルンアルンプロジェクトで販売しているコーヒー豆は、暁の家のスタッフが作った豆と以前暁の家がコーヒー豆の木を支援した山地民のコーヒー農家が作る豆、計2種類を合わせて販売している。どちらも有機栽培に限ったもので、化学肥料や農薬に頼ったものは作っていない。山地民が作ったコーヒー豆 1kg あたり 130~150thb の間で買い取り、暁の家で加工して販売している。この 1kg あたりの価格を決める際、欠点豆や割れている豆を全て%にて記録し、飲んだ時の味も含めて山地民から買い取る価格を決めている。タイの前国王によって 1969 年に始まった山岳民族の生活向上を目的としたロイヤルプロジェクトでは、一律の価格でコーヒー豆を山地民から買い取っており、中には有機栽培でない豆も含まれているという。有機栽培で作る際、生産量がグンと落ちるため多くの生産者は効率の良い農薬や化学肥料を使用して栽培するという。一定の報酬を与えているという点ではある意味山地民の生活を救っているが、持続的なコーヒー農業や山地民の健康面において不安を感じる。ルンアルンプロジェクトで行なっているコーヒー豆の支援は 100%有機栽培であることから生産者や暮らす村の環境を守っていけるという信頼がおける。

5. 生産～流通までの年間スケジュール

6月	コーヒーの肥料をまく
7月	コーヒーの花が咲き始め、次第に花が大きくなる
8月～10月中旬	実が赤くなり始める
11月～2月	コーヒー豆の収穫が始まる（完熟したものを手摘みする） →その日のうちに皮をむく作業を行う 精製も終わる
3月	山の人からコーヒー豆を買い取る
4月上旬	コーヒー豆を休ませる
4月中旬～5月下旬	畑を耕す作業を行う 次のコーヒー豆に向けての準備

6. 生産物の消費

ルンアルンプロジェクトでは 250g の挽き豆または焙煎豆を 200 バーツ(日本円でおおよそ 780 円)で販売している。購入者は日本人、タイ人それぞれ6:3の割合である。流通先としては、バンコクの日本人会でのバザーや個人購入、またコロナウイルスが流行する前はタイ国内のカフェに販売していた。売り上げについてはコーヒー豆だけで年間 250,000 バーツ(日本円でおおよそ 980,000 円)以上の売り上げだ。実際にルンアルンプロジェクトのコーヒー豆を購入した人にコーヒーの感想を聞くと、皆さん口を揃えてとても飲みやすく優しい味のコーヒーだと言う。農薬、化学肥料を使わないという徹底した栽培があつての味だと強く感じた。そのため非常にリピーターが多く、安定した売り上げにもつながり、結果的に山地民の生活を保障している。

7. 家計に関する調査

暁の家で働いているスタッフは給料のほかに、住む場所や食事3食が提供されている。そのためスタッフは基本的に暁の家で生活しており、実家が山奥などにあり遠い人でも困ることはない。ここでの給料を両親や兄弟のために仕送りしているスタッフも少なくなく、ルンアルンプロジェクトのおかげで山地民の生活を守っているとわかった。スタッフは日曜休みで、その日は皆それぞれチェンマイ市内へ出かけたりカフェに行ったりと私たちと変わらず好きなことをしている。山で生活しているだけでは経験できないような仕事や人とのつながりを、暁の家をもとにできておりこのプロジェクトの意義を強く感じた。

8. まとめ

日本人の代表の中野さんを中心として発足したルンアルンプロジェクトは、タイの山地民の生活を守るプロジェクトであり、それと同時にオーガニックコーヒー豆の生産によってタイだけでなく日本にもタイの山地民を知ってもらうきっかけを作っている。現在はスタッフがあまり多くはなく、一つ一つ手作業のため今後円滑に物事を進めるためにも組織の拡大化にも努めるといいと感じた。タイに数多く存在する山地民のボランティア活動だが、中でも今回の調査先である暁の家・ルンアルンプロジェクトは、経済的・社会的に意義のある活動を行なっている。

留学中の生活・研究でのトピックス

長年の夢であったタイ留学は、コロナウイルスの影響を受け2年延期してのものであったこともあり今回の留学は非常に心に強く残る留学であった。留学中は上記の研究に加え、チェンマイ大学の留学生向けのタイ語やタイ文化に関する授業を1年間受けていた。渡航前に簡単な日常会話をできるように準備してからタイへと行ったが、現実はその簡単ではなく最初はタイ語に苦戦する日々であった。しかしタイ生活3ヶ月ほどになると日常生活は難なくタイ語でできるようになりタイ人の友達も増え、非常に充実した日々を送っていた。

コロナウイルスによる規制もだんだんと無くなり、タイの伝統行事やイベントも多く開催されるようになり積極的に参加した。特にロイクラトン祭りという灯籠に願いを込めて川に流すお祭りは、映画で見るような世界観で非常に感動した。今回タイに長く滞在したからこそタイのリアルな生活や行事を経験することができ、肌でタイを学ぶことができた。



今後の社会貢献

今回、松下幸之助記念志財団のご支援、ご協力のもと本当に貴重な経験を1年間することができました。財団の皆様、また現地や日本で支えてくださった皆様にも心より感謝いたします。今回の留学はたくさんの支えがあってのものでした。慣れない土地での生活は普段より体調も崩しやすく何度か苦しい時期もありましたがなんとか乗り越えることができました。心より感謝を申し上げます。

帰国後も、継続的にルンアルンプロジェクトの支援を行い、大学の卒業製作としても今回の研究を大いに活用しようと考えております。また、タイの格差問題にも目を向け続け、また現地で協力できるようなことがあれば積極的に活躍したいと考えております。